

1994年9月15日発行 1975年2月28日第3種郵便物認可  
毎月1回15日発行  
定価／150円  
年間購読料／2,000円（送料共）

編集／緑の地球ネットワーク  
**Green Earth Network**

大阪市港区岡元町3丁目9-16 西建ビル（〒552）  
Tel. 06-583-1719 Fax. 06-583-1739  
郵便振替 00940-2-128465（大阪4-128465）  
COM21通巻323号 発行/COM企画室

## 緑の地球

# GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- ネパール・ヒマラヤを緑に！現状と今後の課題 … P 2
- 黄土高原緑化調査団に参加して ..... P 3



天鎮県賈家屯郷で村人といっしょに労働。溝を掘った斜面にはやがてアンズが植えられる。

1994・9

29

# ネパール・ヒマラヤを緑に！

現状と今後の課題

GEN代表世話人 佐野茂樹

7月6日から約3週間のネパール行きは無事に終了しました。

蛇籠工事第1期が完了したこと、10月の補足工事を確認したこと、サウル苗場本格経営のメドを立てたこと、ムスタン各地のみならず、サービン、ファブレ両村の村おこし計画に一歩ふみこんだこと、以上が成果です。

サウルへの往復はかつてなくきびしいものでした。

往路は強い日射しにあぶられ、帰路は連日大雨に見舞われました。スタッフのカルマ・シェルバは、6月に私が要請した故郷の村の調査に行きましたが、その際、暑さと水にあたってゲッソリとやつれています。同行のリンヂ・シェルバも、それが完治せぬせいか、サウルに向かって歩きはじめすぐに発熱、耳下腺を大きくはらして苦しそうでした。解熱剤投与以外に方策がなく、彼の負う重い荷物は他の3人が分け持つことにして進みました。幸いにも応援のリンヂはぐんぐん回復し、タシ・ワンドゥは静かに黙々と底力を發揮してくれました。彼は6月中、ほとんどサウルに在って苗場整備を完了し、東の間ボカラで家族と再会して、すぐにはサウルへUターンだったのですが。

苗場は見事に整備されていました。5月に播種したゴブレ・サラとバカイノはしっかりと発芽していました。残念なことにウティスの発芽は全く思わしくありません。

今回は、在ボカラの森林レンジャー、カマール・セルチャンの奔走にもかかわらず種子が入手できず、ビニール・ポットへの植え替えのみにしました。また、上方森林中の水場からタシが掘り込んでくれた長い運河から苗場への給水プランを確かめました。

本格的播種・育苗は来年3月～6月。用意する種子もしくは稚苗は以下のとおり。

○ゴブレ・サラ

○ジュール・サラ（とうひ）

○ペチュラ・ウチリス（白樺）

○タリス・パトラ（もみ）

○ラリ・グランス（しゃくなげ）

他に、ネパリー・チェリー、泣き柳、ボブラ、くるみ、梅、葛などです。

これらは用途（侵食防止、護岸、防風、用材、燃材、飼料、換金等）を考慮するとともに、サウルよりも標高の高いダンガルジョン、パリヤクはじめムスタン各地に適合するものを選別しています。小さな苗場ですからトータル2万本程度ですが、ここで成功すれば、新苗場建設に着手します。

5月までとちがって状況が一変したのは、遅れていた蛇籠工事が一気に完了したことです。

タマ川右岸要所要所に、高さ1m（所によっては1.5～2m）、巾1m、総延長400mを越す蛇籠がしっかりとしつらえられました。村の畠と住居をブロックする不可欠の治水インフラの整備はまことに力強いかかりです。補完として今年10月頃に、カリ・ガンダキ本流の旧蛇籠を補強するべく、より強力な一式を設置することになりました。それに必要な鉄線900kgはすでに確保、ネットされてあります。

来期には、タマ川左岸に設置することを企画中、詳細はこの10月訪問時に合意の運びとなりましょう。

なお、これまでの蛇籠経費は既払い20万ルビスで十分間にあい、これから経費は残額30万ルビスをタシに預託、運用の便をはかることにしました。

ひとつずつ必要なものごとが具体化していますが、かえって準備に手間どり、追加費用もかかるのが、20年常駐用の住居兼仕事場の完備です。「入れもの」は完工しましたが、実際に何人の人びとがそこで生活し活動する態勢をとるのは並大抵のことではできません。数例をあげれば、

○飲料水を得るため、水源から300m以上もパイプを引き、埋設しなければ



なりません。

○住居できるよう様々な補装。床整備や壁ペインティングなど。

○はし、皿から机、椅子に至る家具調度一式の完備。

○肥料づくりを念頭に置いたトイレの完成。

○（医療を受ける条件は皆無なので）病気・ケガに備えた医薬品一式の常備。等々です。ろうそくを忘却だけで、夜の仕事はすべておじやんになってしまふのです。

この10月、山のような荷物とともにサウルにむかわなければならないでしょう。更に、居住条件のために引き続き、多くの労をさくことになります。

この10月～12月のネパール行きでは、サウル緑化を拡張した形での、タク・コーラ地域の緑化関連プランをツラチヤン氏らと仔細に検討することになります。のみならず、ダンガルジョン、パリヤク両村を訪ね、村の人びとともに、緑化可能性の検討をすることになります。最大の懸案は水供給です。

ムスタンのみならず、カトマンドゥから1日行程のサービン村では、村の人たちの自主的学校建設の仕上げに協力することになります。

また、はるかエヴェレスト南麓のオカルドゥンガ郡ファブレ村では、村委員会（政府）の要望を受けて、緑化はじめ村おこしの協力可能性を真剣に話しあうことになります。



# 黄土高原緑化調査団に参加して

調査団長 立花 吉茂

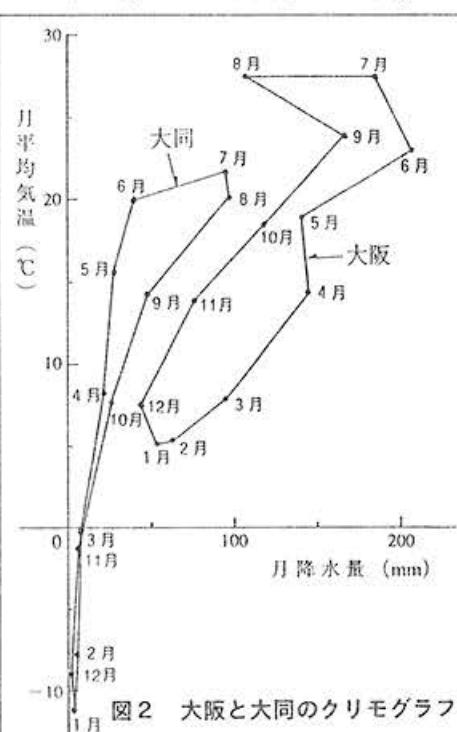
8月1日、北京には予定どおり到着したが、大同行きの汽車が遅れて、乗り込んだのは夜半2日になっていた。スピードに馴れてしまったせいか、250kmの距離を10時間もかかって走るのがもどかしいが、いつしか眠ってしまい、気がついたら夜が明けていて、ボプラの散在する大平原を走っていた。

中国大陆へは3年ぶり、長江より北へは初めての訪問である。噂に聞く黄土高原の実態はどんなものか、しっかりと見極めたいと気を引き締めた。

## ● 気候帯から見た黄土高原

緑化の仕事で大切なのは、そこが元から森林があったのかどうか、を知ることである。森林があったのに、人工、天災で消失したものなら一刻も早く復活させるべきであるが、もともと森林がなく、草原や砂漠地だったとしたら、木を植えるべきかどうか、議論が必要になる。自然に反した行為をしても良いのかどうかの議論である。黄土高原は、昔、森林に覆われていた、と土地の人たちは信じている。はたして本当なのだろうか？ このチェックを科学的におこなったのであろうか？ こんな疑問を感じたのは、吉良の温量指数、乾湿指数に基づく気候類型と植生とが一致する気候帯から見て、この地域がB's（乾燥地ステップ気候）に属するからである（図1）。黄土高原の夏は暑い。海拔約1,000mだから平地よりも5~6℃低いが、暖かさだけから見るに米の栽培も可能である。もし水が豊

富にあれば。しかし、乾湿指数5以下というのはいかにも厳しい環境である。植物とくに樹木が繁るには、生长期に水があることである。冬に水があるても植物は生長できないから、暖かい季節に水があるかどうかが決め手になる。黄土高原のずっと北、シベリアには森林がある。夏が涼しいから水の蒸発が少なく、トウヒの仲間が育つのである。この辺の詳細がきわめて重要である。これを知るためにクリモグラフが役立つ（図2）。しかし、残念ながら気象



調査点が少なすぎる。日本では小中学校に気象観測の露場があり、温度や雨量が測定されているから、気象台のデータよりも細かく地域差を知ることができる。われわれの援助でこのデータを取れるようにしたいものである。

恒山（2,017m）のように平地に比べて12℃も低温になると、蒸通発量が少なくなり、マンシュウクロマツ（油松）、モンゴルマツ（樟子松）、カラマツのような北方系の樹木が育つ。黄土高原では1,000m前後の所よりも2,000m以上の山地がむしろ緑化しやすいのである。

## ● 土壌の問題

粒子の細かい黄土は通気性が悪い。

現地の人たちは「水」に気をとられて土壤の物理性の問題を忘がちにしているようである。もちろん、土壤の酸度や栄養塩類の濃度などの化学的な面も重要であるが、私は物理性を重視したい。遇架山でモンゴルマツが良く育っていたが、そこの土は瘦せてはいるが他と違つて砂の混じた通気性の良い土壤であった。

土壤の改善は容易なことではないが、放置して草を生やし、それが積もって土壤表面に腐植ができると植林が可能になる地域ができるだろう。これには年月を要するが、自然保護区として、人や家畜を入れずにおけば、遷移が進み、草地のようすから、植林の可否が判断できるようになるだろう。ただガムシャラに植えよ、植えよ、ではあまりに精神主義ではなかろうか？

## ● 有用植物園の設置

一方において「自然保護区」を設置し、一方で有用な樹種の導入と馴化を図る両面作戦が必要であろう。モンゴルマツの導入は唯一の成功例である。もし、育つものであれば、樹種数は多い程良いのはいうまでもない。多様性は病虫害などの問題のみならず、気候変動などにも耐えていくものを残すことになるからである。いきなり大規模な植物園を考えず、小さな実験圃場から始めればよいのである。

## ● 地下水の調査

黄土地域の「水収支」を徹底的に調べる必要がある。地下水はどうなっているか？ 蒸発、透水、通水、植物からの蒸通発など、わが国のそれとは著しく異なっているように思えるからである。それも、細かな地域性があるに違いない。ボプラなどの根の届かない地下水をくみあげるようなことは不可能なのか？ 秋の雨水の凍結保存は不可能なのか？ マルチングで水の動きは制御できるか？ などなど、緑化と人びとの生活に係わる問題は多い。



図1 東亜の気候区分

## 1994・夏・黄土高原

～いろいろありました～

## 中国側が体制強化

黄土高原における緑化協力が急速に発展するなかで、カウンターパートの山西省青年連合会・大同市青年連合会は専門の事務所をつくって、この協力活動をいっそう強力に支えてくれることになりました。

山西省の省都・太原に「緑色地球網絡山西合作弁事処」(主任=席小軍・山西省青年連合会秘書長)、現地・大同に「緑色地球網絡大同事務所」(所長=祁学峰・大同市青年連合会副主席)がおかげ、大同事務所では所長はじめ数人の専従者が活動し、技術顧問の参加もあります(「緑色地球網絡」は「緑の地球ネットワーク」の中国語訳です)。

7月8日に正式発足しましたが、その決定文書は、1.事務所の成立でこの協力は新しい段階に入ったこと、2.環境修復を世界的課題としてとりくまなければならないこと、3.貧しい黄土高原の経済建設のために青年の力を發揮するチャンスであること、4.国際協力の発展のために各地の青年連合会・共青団はこの活動を最大限に重視し全力をあげることを訴え、2つの事務所の役割を定めています。

事務所の成立で、日本側との連絡もずっと円滑になり、夏のワーキングツアーや専門家の考察団派遣にさいしてその力が大きく發揮されました。

私たちの協力がより大きく、かつきめこまかく発展するための基盤が整ったということができると思います。

## ワーキングツアー

今回のワーキングツアーの特徴は、まず「いなか」にとびこんで、徐々に都市部に移動したことでしょうか。

最初の訪問地天鎮県を、GENが訪ねるのは初めてです。びっくりするような大歓迎をうけたのですが、宿泊し

た招待所では全員がお風呂をすます前に水が出なくなってしまいました。翌日訪れた賈家屯郷では、バスの中から見る侵食谷のすさまじさに、水土流失の深刻さを感じさせられました。

広靈県の邵庄郷へは、橋のない川を渡っていきます。少し雨が降ったと思ったら、行きはからからにかわいていた川に勢いよく水が流れ、危うく帰れなくなるところでした。

渾源県の西留郷は、もう何度もワーキングツアーや訪問しておなじみになっているところです。GENの宿泊所、ヤオトンは未完成でしたが、なんとか泊まれるようにしてくれました。

その次の日、渾源県城でようやくホテルらしいところに宿泊、「ベッドカバーがある」と喜んだのですから、それまでどんなところに泊まっていたかわかるというものです。

あとは、大同、北京と都会へ出でいくに従って様々な変化があるわけですが、ツアーや参加者の実感からいえば、ホテルがきれいになる、食事が口にあってくる、食事の量が減ってちょうどよくなる、とほっとする反面、空気が悪くなる、ゴミが増える、そして何より人びとの顔からのんびりした表情が



ヤオトンは未完成だったが、ずいぶん立派な建物だ。

消え、殺気だってくる、というのも正直なところです。

今回のツアーや、そういった参加者の率直な感想を、毎日交替で日誌につけてもらいました。会報の紙面では次号に少し紹介しますが、出発から帰着までを1冊の冊子(B5判コピー誌26ページ)にまとめてありますので、ご希望の方にはお預けします。お申込みは、冊子代1冊200円と郵送料190円(2冊~5冊まで270円)を切手で同封の上、住所、氏名、電話番号を明記して郵送でGEN事務所まで。

## 専門家考察団

専門家を中心とする黄土高原考察団は立花吉茂さん(花園大学教授・大阪市咲くやこの花館技術顧問)を団長に、遠田宏さん(東北大学植物園園長)、前中久行さん(名城大学助教授)など14名のメンバーで、8月上旬に現地を訪れました。

中国側も山西農業大学などから数名の研究者、技術者が同行して、行く先々で熱心な交流をおこないました。



小学校付属果樹園までついてきた村人たち(広靈県邵庄郷)。村中総出で大騒ぎだ。



緑化協力地は、地形・土壤・降水・温度など自然条件が全体として困難なうえに、社会・経済関係を含め、複雑な要素がモザイク状にいりこんでいます。

雨量ひとつとっても、渾源では「ことしは記録的大雨」とのことだったのに、山ひとつ越えた大同県徐町郷は「大干ばつ、あと1週間降らないと、作物も春に植えた木も全滅の恐れ」ということで、雑草まで弱っていました。ところが1週間後に問い合わせると、「一昨日と昨日、雨が降って、5軒の家が流れた」というあります。

そのようななかで、今回訪れた植林地でも、樹木が勢よく育っているすぐわきで、活着率が10~30%のところがあります。

中国側の専門家からはおもに技術的な欠点が指摘され、日本側からは生態システムとして検討しなおす必要性が強調されました。

詳しいことは9月30日の報告会などで紹介しますが、とりあえず最善の技術を集中して補植をおこなうことと、日本側の発案で新しいとりくみをおこ

なうことになりました。

1. 草が土壤改良にはたす役割など、自然の生態系を重視する。西留郷の植林地で、小面積を柵で囲った実験区を数か所設置して植生を詳しく調査し、さらに直蒔きを含めたさまざまな方法を試す。ここは土壤粒子が小さすぎて通気性の悪いのが原因と思われる所以、石炭ガラや石くずなど通気性材料を試用してみる。
2. 小地域ごとの気象変化が大きいので、付属果樹園をつくったり、植林協力をしている村の小中学校に百葉箱をおき、温度や降水量を測定する。適地適作の基礎データをうることができ、児童の科学教育にもやくだつ。
3. 大事務所が提起している「地球環境林センター」構想に94年秋から着手する。各地の地球環境林のための育苗施設、実験区、見本園、宿泊所などをつくり、各種の実験や青年の技術研修に役立てる。また内外の有用植物を見本園に集め、試験

栽培と調査をおこなう。

今回の調査を通じて、従来からのいくつかの問題に解決の糸口ができました。また今後、検討しないといけない問題もたくさんでています。私たちの緑化協力も、また一步、新しい段階へふみこんだといえるでしょう。



問題のでてきた龍首山プロジェクトを視察する専門家団。

## 山西省の自然

石原忠一

(92年緑化協力団団長)

(23) アンズ

周口店へ、北京原人の洞窟を視察するため、青年同盟の男女の幹部と一緒に出かけました。たまたま2人とも李姓で、「中国人の苗字でいちばん多いのは李ですヨ」と、にぎやかに話がはずみます。

李(スモモ)も桃も、梅も、東アジアの原産で、有史以前からわが国でも栽培されてきました。梅に近縁の杏子は、山西省などの山地に原生分布すると言われ、古来カラモモと親しまれ、唐音でアンズと呼んだのは、江戸時代からです。バラ科のサクラ(prunus)属。

紀元前、小アジアを経てギリシャに伝わり、改良を重ねてヨーロッパにひろがっていましたので、分類学の祖、

C・リンネは、ブルヌス・アルメニアーカと命名しました。新天地のカリフ



オルニアの風土に適して、1千万本を越す果樹産業となり、干アソズ・ジャムなどで世界の市場を支配しています。

春早く葉にさきだって開花し、昆虫の媒介で受粉したあと、雌しべの根元がふくらんで、7月には浅いオレンジ色に熟します。この独特の色を“あんずいろ：アプリコット”と呼び、芳香と甘酸っぱさが、季節の味覚として賞賛されます。

梅干でおなじみのとおり、表面の外果皮の中の、柔らかい部分が中果皮、歯がたたない核は内果皮です。そのまた中に生命を宿した種子があり、こんな果実を石果と呼びますが、核を割って取り出した種子は、杏仁と名付けて漢方薬として珍重します。故事に因んで、医家を杏林と称して敬愛しました。

今は秋、来年の花芽が枝々で準備を整えています。原産地山西省の村々に杏子がたわわに実ることを、心待ちにしましょう。

## アイヌモシリ 二風谷ワーキングツアー 開かれる！

8月18日から23日まで、北海道における第1回目のワーキングツアーが富良野、二風谷で行われました。22才から65才までの男女あわせて9人が6日間の生活をともにしながら、東大演習林の原生的な森林を見学したり、二風谷のアイヌ民族のチブサンケ（舟おろし祭）に参加したり、盛りだくさんの日程で多くの体験をしました。

参加者は、ほとんどが初顔合わせで富良野駅に集合し、テレビドラマ『北の国から』で有名な“麓郷の森”を観光してから、宿舎に入りました。東大演習林では有澤浩さんが丸1日案内してくださいました。感謝。

二風谷では、前夜祭、チブサンケ、お昼のアイヌ料理のごちそう、丸木舟

のり、夜の盆踊り大会。地元の人たち、二風谷が大好きで集まつた人たちにまざつておおいに楽しみました。

丸1日、木彫り体験の指導をしながら、アイヌ文様や文化のことなどを話してくださいました高野繁廣さん、忙しいなか案内をしてくださいました、二風谷アイヌ文化博物館の米田秀喜さん、ありがとうございました。

これから、私たち“緑の地球ネットワーク”で、『ナショナル・トラストによる森林回復の運動』と一緒に始めようとしている貝澤耕一さんの案内で周辺の山を見てまわりました。自然の林と人間の手

で皆伐された林、直径1メートル以上もある切り株と、それから雄々しくよみがえろうと芽を出したカツラの木。半日以上、約1万歩の山歩きで見、聞き、感じ、考えました。トウモロコシ畑で全員、2時間ばかりの農作業も体験しました。

次の号に詳しい報告と参加者の感想文をのせます。ご期待ください。

（武田繁典）



おせわになった貝澤さんと参加者たち。

## 神戸から黄土高原へ 鷹匠中学校のとりくみ



黄土高原緑化に協力しようと再生紙ノートのグリーンマークを集めてくれていた鷹匠中学校から、「たくさん集まつたから取りに来てください」と連絡が入ったのが7月はじめ。ワーキングツアーの時に持っていくのにちょうどいい、と早速うかがいました。

まず、生徒会役員のみんなに黄土高原での緑化協力について説明をしました。くずれそうな小学校の校舎や、そこで学ぶ子供たちの写真などを見ながら、熱心に聞いてくれました。

それから、姫野文具店がグリーンマークを1枚5円で買い取ったお金と生徒たちの募金をあわせて55,415円、集

まったグリーンマークと交換した再生紙ノート160冊、そして何人かの生徒が中国の子供たちのために描いてくれた絵を受け取りました。

ワーキングツアーは夏休みと重なったため、残念ながら中国の子供たちに直接手渡すことはできませんでしたが、大同事務所に預けてきましたので、9月に再度訪中する高見世話人が山西省の小学生たちからの返事を持ちかえてくることでしょう。

## 自然と親しむ会 「植物の繁殖と土づくり」

「緑の親指」という言い方が、英語にあります。植物を育てるのが上手な人のことを「緑の親指」を持つ、と言うのです。それでいうなら、立花吉茂先生は「緑の五指」の持ち主なのでしょう。

その立花先生から秘訣を教わろうと7月3日、約20人が、咲くやこの花館に集まりました。午前中は館内を見学、天井を破ろうかという勢いで伸びているヤシの木を見たり、「奇想天外」の成長速度やサボテンの味などについて

（その他にもいろいろ）興味深いお話をうかがったりしました。

午後からは容赦なく照りつける日差しの中、咲くやこの花館の裏手で、砂と土の配合の割合や、挿し木、接ぎ木のコツなどを実習をはじめて教わりました。土さえしっかり作ってあれば、植物の成長にあわせて「鉢上げ」をしていくだけで肥料はほとんどいらないというのは、園芸好きのわが母親に早速受け売りさせてもらいました。

最後には参加者から日頃の疑問などを立花先生に質問、丁寧に答えていただきました。この日教わったことをいかせば、「緑の小指」の持ち主ぐらいにはなれるかな。



熱心に接ぎ木のやりかたをみつめる。

## 香港・長洲島における木を守る運動（2）

深尾 葉子（GEN世話人・大阪外大講師）

前回長洲島となっていたのは「長洲島」の誤りでした。また、香港は「亜熱帯」ですが前回「熱帯」となっていました。お詫びと訂正を致します。

開発によって伐採の話が持ち上がった、長洲島の木は、古い市街区のほぼ真ん中に位置しており、波止場から島の反対側の浜辺へ抜ける道をさえぎるようにして生えている。周辺は飲食店や土産物店が立ち並んでおり、我々が訪れた日曜日には、香港島などからやってきた観光客でごったがえしていた。丁度反対側が請願を出した直後だったこともあり、木の周辺には、保護を訴える横断幕や、また周辺の店などに思い思いの語句を書き連ねた、反対のはり紙が貼り出されていた。

この木は樹齢300年。島の「風水木」として信仰の対象となっていた木で、根元にはお札や、お供えもの、線香などが飾られており、人びとの信仰のあつさを示していた。この木にまつわる言い伝えは多くあり、この木の近くで

お参りをすると病気が治る、とか生氣を得られるとか言われている。恐らく「氣」を発する木なのである。なかでも、日本軍がこの島に上陸した際、多くの島の人びとが殺されたが、この木に吊るされた人だけが生き残ったという言い伝えや、また逆にこの木の周りでたくさんの人が殺されたために、人びとは慰靈のためにいっそうこの木を拝むようになった、また、かつてこの木の枝を切った男性が数日後に突然亡くなつたという話など、その内容も様々であった。いずれにしても、この古木は、島の人びとの記憶を刻み込み、島の人びとと共に歴史の激動を生きてきたのである。

今回の伐採計画は、消防上の安全確保を理由とした島全域にわたる道路拡張とともに浮上してきたものである。しかし、開発には利権がつきもの。香港島までフェリーで約1時間という地の利のために、ベッドタウン化しつつあるこの島で、土地を持つものと持たざるものとの間で、同じ親族内でも対立が生まれている（ここは離島なので、新界と同様土地の所有権を有する「原住民」が存在する）。当然、この木の伐採をめぐっても、利権を持つ側と、借家等で立ち退きをせまられている側とで、対立が生まれている。この木の近くに住みつき、地域に溶けこんで生活している日本人一家のご夫妻は、そんな島の変容ぶりを話してくれた。



木陰で涼をとりながら過ごす島の老人。この木にも様々な思い出が刻まれているのだろう。

周辺の家屋のはり紙に目をやると「榕樹本無罪、奈何官無情」（榕樹には罪はないのに、お上の無情はいかんともし難い）だとか、この木は島の命脈だから、切ってしまっては島の地脈が乱れる、都市の発展は重要だが、環境保護や緑化はもっと重要、といったキャッチフレーズが次々と目に入る。島の人びとが、風水や環境保護といった、様々な理由を用いて、木を守ろうとしているのが見て取れた。また、島を歩くうち、他の同様の古木の下で、老人たちが涼みながら話をしたり、孫を遊ばせたりしている風景が印象的であった。島はいま音をたてて様変わりしようとしている。反対運動の結果はまだ出ていないが、おそらく開発の計画を動かすことは至難と思われる。

人びとの記憶の拠り所となり、また社交の場ともなっていた村の木々がいま、華南の各地で開発とともに姿を消しているのだろうか、と同様の運命にある他の多くの木々に思いをはせ、また1本の木が持つ意味の深さを考えさせられる1日であった。



島の街路沿いに立つ木。

### 黄土高原緑化調査団報告会のお知らせ

黄土高原で緑化協力をはじめて3年目、この夏初めて日本から専門家の調査団が現地を訪れました。新しい事実や問題点などの発見があいつぎ、多くの収穫を得たと同時に、今後の課題も多く提示されました。

その現地の詳しい様子を、調査団長の立花吉茂先生に報告していただきます。ビデオの上映、ワーキングツアーの参加者の報告もあわせて行う予定です。

●日時：9月30日（金）18時30分～21時

●場所：弁天町市民学習センター

（JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅すぐ）

●参加費：700円

### GEN講演会「日本の環境破壊と財政危機」のお知らせ

日本の政治構造を浮き彫りにした「ゼネコン疑惑」一問題は政治腐敗だけではありません。高速道路や橋など大規模開発によって日本の自然環境は大きく破壊されました。そのうえそれらの多くは、利用率が予想をはるかに下回り、作り捨てに近いものも少なくありません。「土建国家」を支えるために、膨大な資金が投入され、そのツケは結局、国民にまわってきていているのが現状です。

長く環境問題を研究され、行政の内側からもこれらの問題をシビアにみてこられた河宮信郎さんに語っていただきます。

●講師：河宮信郎さん（中京大学教授）

●日時：10月28日（金）午後6時30分～9時

●場所：弁天町市民学習センター

●参加費：700円

## 歌声をとどけよう 日本童謡の会コンサート

8月20日、中之島中央公会堂で、日本童謡の会近畿本部のふれあいコンサートが開かれました。「牧場の朝」「線路はつづくよ」などの合唱や、童話「力太郎」の上演などで、楽しいひとときを過ごしました。

今回のコンサートは、GENの活動にご賛同くださいり、「中国山西省・黄土高原の植林にチャリティー」として、会場でのパネル展示や、募金活動にご協力をいただきました。

GENからは15人ほどが募金の呼びかけに参加しましたが、童謡の会のみなさんが前もって使用済のテレホンカードや切手をたくさん集めていてくださっていたので、みんな大感激でした。

おかげさまで、現金が104,007円、使用済テレホンカードなどが約2150枚、古切手約37,000枚が集まりました。黄土高原の緑化に大切に使わせていただきます。

### 編集後記

せっかく中国でおとしてきた体重を日々と取り戻しつつあります。食欲の秋はこれからだというのに、先が思いやられることです…(T・H)

## ワン・ワールド・フェスティバル'94のご案内

昨年、大坂城公園で第1回ワン・ワールド・フェスティバルが開かれたのを覚えておられる方もいらっしゃることでしょう。

今年は、10月16日(日)に、「ワン・ワールド・フェスティバル'94」が開催されます。今回はGENも参加して、パネル展示をとおして黄土高原やネパールの緑化の必要性を訴え、緑化基金や使用済みテレホンカードを募ろうと考えています。

関西のNGO、市民グループなどの団体が参加し、国際協力活動の紹介、ライブステージ、トーク、パネル展示、民族料理の模擬店など、もりだくさんです。GENのテントを手伝ってやろう、という方はもちろん大歓迎、ちょっとのぞいてみようかな、という方もぜひお立ち寄りください。

ワン・ワールド・フェスティバル'94

●日時：10月16日(日)午前10時～午後4時(雨天決行)

●場所：大坂城公園・太陽の広場

●お問い合わせは：

関西国際交流団体協議会内「ワン・ワールド・フェスティバル'94」運営委員会 TEL06-773-0256

### 自然と親しむ会

## 「神戸市森林植物園で種あつめ」

ことしの春、恒山国家森林公園の見本園苗圃に、東北大学植物園などからよせられた樹木の種子や挿穂をとどけました。育っているものもある、とのことですですが、時間の関係で夏の考察団は見れず、9月に高見世話人がもう一度行くことになっています。

大同市南郊区の「地球環境林センター」にも新しく見本園ができるようになりました。そこで試験栽培する樹木の種子を、これまでお世話になってきた神戸市立森林植物園と大阪市立大学植物園(94年11月の予定)で見学かたがた集めさせていただきます。樹種によっては、ネパール・サウル村の苗圃でも試すことができます。ご参加をお願いいたします。

▼場所 神戸市立森林植物園

▼日時 10月23日(日)朝9時20分

▼集合 三宮そごう百貨店東側バス乗り場

▼参加費 大人500円、子供200円

(バス代・入園料は別、保険料を含む)

▼森林植物園の福本市好さんが案内と指導をしてくださいます。